

巻頭言

情報リテラシー考

奥平 雅士



母校の高校同窓会から、創立 100 周年に向けて 16 年ぶりに (!) 名簿を発行するとのお知らせとともに現況調査依頼がきました。これに対し、私よりもずっと若い年代でも「詐欺ではないか」と話題になったとか。たしかに現今の情勢で様々な詐欺事件が発生しており疑いを持つことは頷けるところです。しかし、同窓会現会長の写真入りメッセージが入っており、はがき送付先が母校になっているにも関わらず、その情報をきちんと分析できない人こそがうまく詐欺師に付け込まれことになるのではないかと危惧しています。

このような詐欺の問題とは別に、近年 SNS やネットニュースサービス等を通じてさまざまな情報が流れ込んでいることから生じる問題もあります。マスコミが独占していた情報流通が他の多くの媒体からも発信されるようになったことは、情報における「草の根民主主義」の観点からも、また情報の全てが信用できるわけではないことが頭になってきたことから好ましいことです。とくに、一定の品質を持ち発信者が明らかなマスコミとは異なり、ネットに流れる有象無象の情報は玉石混交です。SNS やネットニュース、検索などで簡単に得られる情報は正しいとは限らず、誤った情報が引用・転送されることで、あっという間に広がってしまう状況が生まれています。そのような、誤った、あるいは意図的に間違えた情報が拡散される一方、その訂正情報は拡散されないなど情報拡散は選択的な(どちらかという誤った情報が拡散しやすい)傾向にあります。

私は、14 年前の横浜キャンパス着任以来、1 年前科目「情報リテラシー演習」を担当してきました。必修→選択→必修と変遷していますが、ほぼ全員が受講している状況は変わりません。着任当初の、「ログインするためにはまず Ctrl-Alt-Del を押す」と教えるところから始めないといけなかった頃に比べ近年は、高校までのコンピュータ教育の賜物でしょうが、キーボード打ち込み速度はもちろんのこと、この演習で扱う「文房具」としてのソフトウェア利用スキルなど年々向上しています。しかし、例えば最終課題であるグループワークなどでは、巷に溢れる情報の切り貼りが以前より増えてきたように思えます。情報を鵜呑みにせず自分たちなりにきちんと分析する、あるいは自主的に何かにトライし、事実を確認して得た情報と照らしあわせて「自分の頭で咀嚼する」姿勢はまだ十分と言えず、誤った情報をそのまま取り込み拡大させている虞も無しとしません。

本キャンパスの「情報リテラシー演習」は「情報機器を取り扱うスキル」を修得する側面とともに、「情報を理解して適切に発信するスキル」を涵養することを目的としてきました。これからは、広い意味での情報リテラシー教育への取り組みとして、情報過多の時代に即して環境情報学部発足以来の、時代を先取りした優れた面を引き継ぎ 2 学部各学科の目的に合致したスキル教育を充実させるとともに、情報を咀嚼して真実に迫ることができる人材の育成を目指すことがますます重要になってきているように思えます。

私は、本ジャーナル第 9 号 (2008. 4) 巻頭言の結びとして「一昔前、活字信仰と呼ばれたものがいまインターネット信仰・メディア信仰となり、与えられた情報をそのまま受け入れる傾向の高まりが見受けられます。健全な情報化社会は、情報発信・流通の特性をわきまえ、情報を吟味して正しく理解し節度を持って行動できる自立した個人の存在が大前提であり、メディア政策やメディアリテラシー教育と合わせ情報の表現・発信・理解教育の一層の充実をはかっていきたいと考えています」と書きました。

時代はますます怪しげな情報や誤誘導を企図した情報に満ち、またその情報をもとに情緒的で短絡的な行動に出るものが年齢を問わず増えています。このような現況を見渡すと「情報を吟味し」、「節度を持って行動できる」ことの重要性がより増しています。今年度学部改組4年目を迎えることからカリキュラムの見直しを図られることと思いますが、この間の状況を踏まえ、また各学科の特性に合わせて導入教育としての「情報リテラシー演習」が他の科目ともうまく連携して、本キャンパス学生諸君の情報分析力や情報発信力といった情報リテラシー能力を一層向上させるものになることを期待しています。

OKUDAIRA Masashi
東京都市大学メディア情報学部情報システム学科教授（執筆当時）